第 398 回「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

『病気や生死と向き合う』～『がん哲学外来の心得』～

2026 年 4 月 16 日 羽田空港から札幌空港に到着した。快晴であった。札幌空港から電車で､札幌駅に向かった。電車の中から、『雪の積もる山脈 と 畑の景色』を眺めて心が癒やされた。 そして、グランドメルキュール札幌大通公園での第 115 回日本病理学会総会(2026 年 4 月 16 日~18 日：『病理医よ 大志を抱け Pathologists, be ambitious!)』大会長：田中伸哉 北海道大学大学院医学研究院腫瘍病理学教室・北海道大学病院病理診断科 教授)に出席した。 【北海道大学の前身の札幌農学校は 1876 年に開校しました。 その初代教頭ウィリアム・S・クラーク(1826-1886)博士は 第 1 期生に高邁な大志 (lofty ambition)を説きました。―― 本総会が、若手を含めて病理学に携わる全ての研究者・診断医が 新たな志を抱く契機となることを祈念します。】と謳われている。筆者は、2010 年の『第 99 回日本病理学会総会会長』を仰せつかったもので『病理学は人生の原点』である。

病理学は【『臨床と基礎の懸け橋 ＝本質的な人間教育の見直し』】の実践であろう！ 今回、西原広史先生（慶應義塾大学医学部がんゲノム医療センター 教授）が、筆者の講演『がん哲学外来の教え』の座長をして頂く。想えば､2013 年北海道の帯広市の北斗病院で､西原広史先生の計らいで､講演の機会が与えられた（添付)。 2014 年４月 19 日の十勝毎日新聞でも『病気や生死と向き合う 北斗病院で がん哲学外来』に掲載されたのが、鮮明に蘇ってきた。

筆者に強い印象を与えた言葉は、小学校の卒業式で、来賓が語った『ボーイズ・ビー・アンビシャス』(Boys, be ambitious)である。 札幌農学校を率いたウィリアム・クラークが、その地を去るに臨んで、馬上から学生に向かって叫んだと伝えられている。 新渡戸稲造(1862-1933) ＆ 内村鑑三 (1861-1930) は、札幌農学校の２期生である。【新渡戸稲造は、アメリカに留学し 帰国後、母校である札幌農学校の教授に就任、教育と研究に勤め、また北海道開発の諸問題の指導にあたるが、体調を崩してカリフォルニアに転地療養をすることになる。 カリフォルニアでの療養中に書き上げ、刊行したのが『武士道』である。 内村鑑三の『代表的日本人』は、新渡戸稲造の『武士道』とならぶ、世界のベストセラーになった。】

4 月 18 日午後は、『日本死の臨床研究会北海道支部』から講演『生きている限り、人には使命がある ～ 天国でカフェ～』の依頼を受けた。 今回の『札幌の旅』は、忘れ得ぬ人生の良き思い出となろう。

対話でケア「がん哲学外来」

北斗病院が開設準備

提唱者・樋野教授が来院、実践

患者に〝言葉の処方箋〟

患者と対話する樋野教授

北斗病院（帯広市稲田町基線7、鎌田一理事長）は、がん患者が医師らとの対話を通して生や死と向きあう「がん哲学外来」の開設準備を進めている。今年度中に試験的に取り組み、来年度以降、本格実施の意向だ。実現すれば道内の医療機関では初めて。12日には同外来提唱者で順天堂大学医学部の樋野興夫病理・腫瘍学教授が来院し、患者2人に〝言葉の処方箋〟を提供した。

同外来は、患者ががんを抱えながらも笑顔で人生を生きる社会を目指し、樋野教授が2008年に始めた取り組み。心理療法的な手法が特徴。現在、全国約30カ所の医療機関やNPOなどが開設している。医師らが患者や家族と1時間程度話し合う中で、生きることとの根源的な意味を見詰める。保険診療として行っているのは金沢大学付属病院だけで、多くはボランティア的に運営されている。

この日同病院で開かれた同外来では、患者と樋野教授がお茶を飲みながら対話。全身にがんが転移して同病院に入院している自営業男性が、「自分が仕事をできなくなると、周りの人がやってくれるようになった」と話すと、樋野教授は「人に頼れるだけ頼ると、自分がやるべきことがはっきりする」と返答した。

観光関連の仕事をしているというこの男性に対し、樋野教授は医療と観光が融合したビジネスの青写真を描いてみることを提案。「仕事と病気の経験を生かして大きなことを考えるのが使命かもしれない。死んでから30年後に実現すればいいじゃない」と話すと、男性は「今までぼんやり考えていたことがはっきりした。夢が膨らんできてきょうは寝られそうにない」と笑顔で返していた。

樋野教授は「大切なのは他人の必要性に共感することで、これは本来誰にでもできること」とし、「病気について誰でも気軽に語り合える社会をつくりたい。人口1万5000人当たり1カ所、全国で7000カ所の対話の場ができれば」と構想を語った。

（丹羽泰太）

平成25年9月17日（火）付　十勝毎日新聞